

## エッセー

# オンライン授業と生成AIが拓いた「学習と省察の好循環」—全学共通科目での実践から

文学部史学科特別専任教授 上田 信

立教大学の全学共通カリキュラムは、専門領域に縛られず幅広い知を身に付け、総合的な判断力を育むことを理念としている。私が担当する科目も、この精神に基づいて、学生が自分の専門の外側にある世界を知り、多角的な視点から物事を捉える契機を提供できればと考えている。近年はオンライン授業の定着により、学びの方法を再構築する必要が生まれているが、むしろそれが全学共通科目の理念と親和性を高めているとも感じている。本稿では、Zoom と生成 AI を組み合わせて活用した授業の一端を紹介しつつ、教育実践上の意義について述べたい。

私がこの春学期に担当した「歴史への扉」では、Zoom の「チャット」や「投票・クイズ」機能を積極的に活用している。「チャット」を使えば、教室で手を挙げて意見を示すのとは異なり、学生一人ひとりが心理的負担なく回答できる利点がある。「投票」では、乾燥地域の山地において「どの斜面がもっとも植物の生育に適しているか」という問いを投げ、四つの選択肢から投票してもらう活動を行った。これは地理学の基本事項ではあるが、日本の気候に慣れた学生の経験則では直感的に答えにたどり着きにくい。実際、回答の多くは誤答「山の南麓」に集中し、正答である「山の上部北斜面」を選んだ学生はごく少数であった。このギャップを出発点に、気候帯の違いや日射量、標高差と湿度の関係などを講義すると、学生たちは「知っているつもり」の前提を相対化し、自らの環境認識が地域依存的であることに気付いていく。オンライン授業では反応が見えにくいからこそ、このような問いかけ型の活動が思考の可視化に大きく寄与する。

さらに、Zoom の自動文字起こし機能を利用して音声文字化し、さらにこの文字起こしデータを、授業後にすぐに生成 AI (ChatGPT) に投入し、TA の力も借りて構造化と要点整理を行った。固有名詞の変換ミスの多くが自動的に修正され、授業中の説明やディスカッションの要点が逐語的に記録された講義録の草稿が出来上がる。内容をチェックしたのちに Canvas LMS を通じて講義録を履修者に配布すれば、講義後の振り返りに役立つ。従来であれば、発話の内容を正確に再現するために多くの時間を要した場面でも、オンライン機能と生成 AI がその負担を軽減してくれるのである。

得られた文章は無加工で使用することはできないが、論点整理のたたき台としては極めて有効である。全カリ授業の履修者の専攻が分散しているため、クイズやアンケートの母集団としては学部授業よりもすぐれている。実際、この過程で生成された整理文は、私が執筆した著書『東ユーラシア全史』（中公新書）を執筆する際に大きく貢献し

た。もちろん講義録をそのまま原稿にするわけではないが、白紙状態から書き始めるよりも、すでに言語化された素材を推敲する方が、筆の進みは格段に速い。自らの講義内容が、新しい研究成果へと発展していく過程は、オンライン授業と生成 AI の相互作用が生んだ新しい「教育と研究の好循環」といえるだろう。

ここで強調したいのは、生成 AI が「文章を代わりに書いてくれる便利な道具」ではなく、むしろ授業内容の構造を再確認し、教育者自身の思考を再編成する媒介となっている点である。授業は学生が多様な知を往還するためのプラットフォームであるのと同様に、教員にとっても自らの専門知を社会的文脈の中で再配置する機会を提供してくれる。オンライン授業と AI を活用することは、その契機をさらに強化するものだと感じている。

また、こうした実践は学生へのフィードバックにも還元できる。学生が投票で誤答を選びやすい理由を分析し、気候や植生に関する固定観念を共に再検討することで、単なる知識伝達ではなく「知識が生まれるプロセス」を共有できる。文字起こしと AI 整理によって得られた講義記録を、次年度の授業で再利用することで、教育内容はより洗練され、授業設計の改善にもつながる。

全カ리가目指す「専門を越えた知の融合」は、単に多分野の科目を並べるだけで達成されるわけではない。多様な学生が自らの前提を揺さぶられ、新しい視点を獲得するための仕掛けが必要である。オンライン授業での投票機能や自動文字起こし、生成 AI を用いた資料化は、そのための有力な方法であると同時に、教員の側にも新たな発見や省察をもたらす。

学びの場は、技術的手段の拡張によって形を変えながら、むしろ本質的な教育理念への回帰を促しているのではないか。全学共通科目の実践は、オンラインと AI がもたらす新しい可能性を柔軟に取り込みつつ、学生と教員がともに学び続ける場をつくる営みであろう。

うえだ まこと